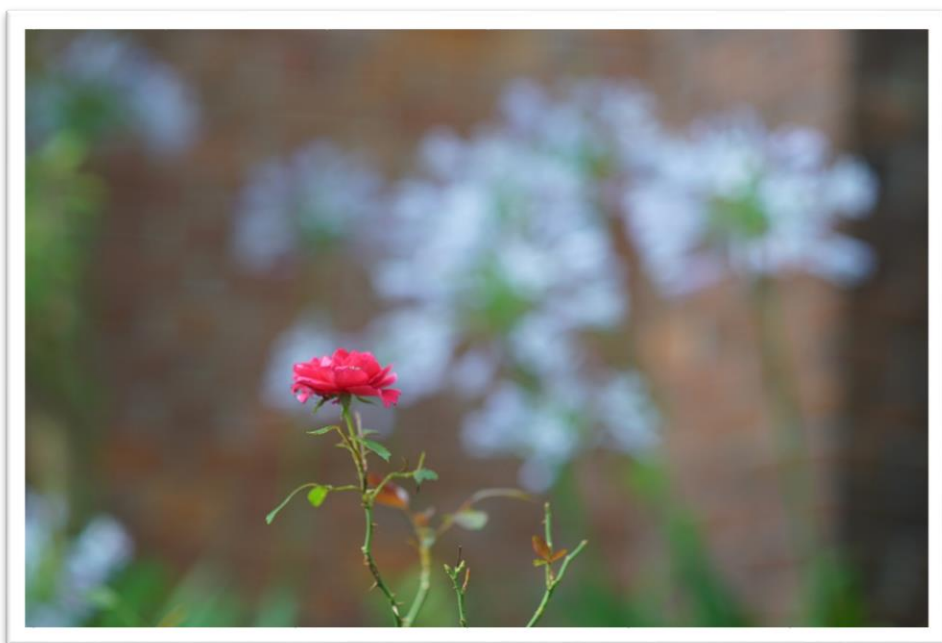


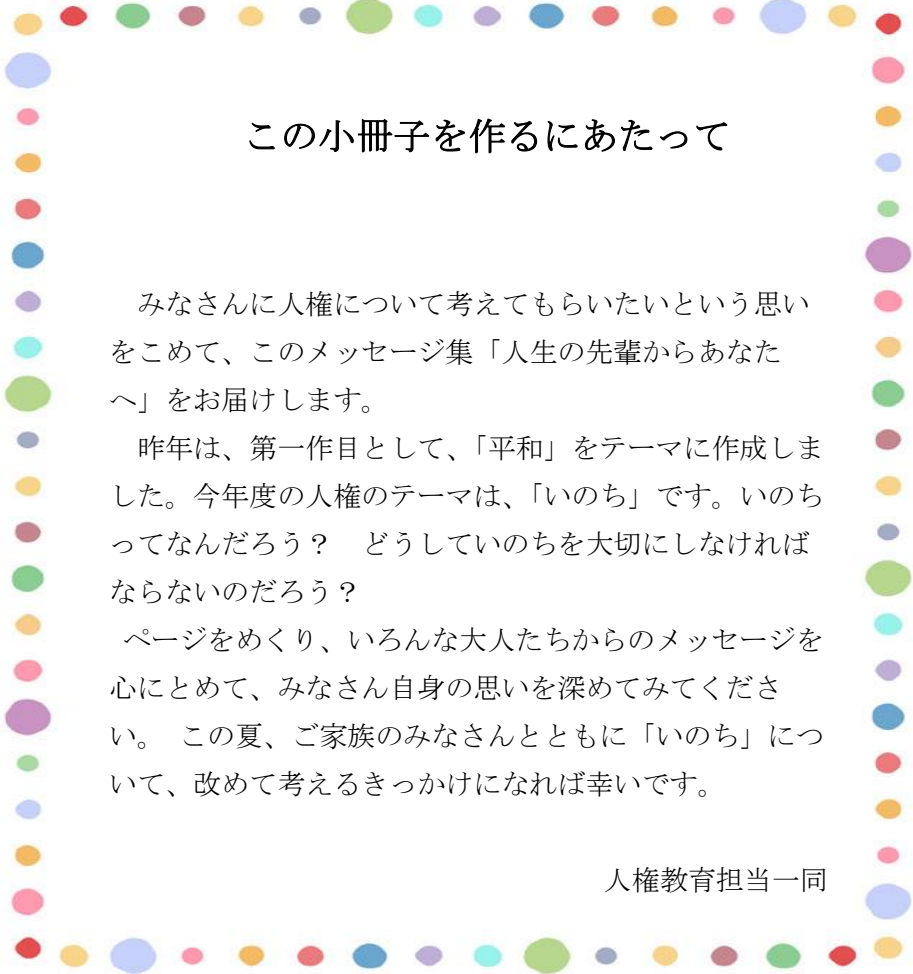
「きみは**愛**されるため生まれた」

～いのち～



人生の先輩からあなたへ  
2018

平安女学院中学校・高等学校



## この小冊子を作るにあたって

みなさんに人権について考えてもらいたいという思いをこめて、このメッセージ集「人生の先輩からあなたへ」をお届けします。

昨年は、第一作目として、「平和」をテーマに作成しました。今年度の人権のテーマは、「いのち」です。いのちってなんだろう？ どうしていのちを大切にしなければならぬのだろう？

ページをめくり、いろんな大人たちからのメッセージを心にとめて、みなさん自身の思いを深めてみてください。この夏、ご家族のみなさんとともに「いのち」について、改めて考えるきっかけになれば幸いです。

人権教育担当一同

この冊子への感想をメールで下記までお寄せください。

E-mail: [st.agnes.jinken@gmail.com](mailto:st.agnes.jinken@gmail.com)

## いのちを愛しむ

「命の誕生は奇跡であり、生かされていることは、不可思議な恵みです。」この現象を享受している私たちすべての者の責任と義務は、「いのちを愛しむ」真逆の一切の言動に対して、凜として立ち向かうことだと私は思っています。

私が生涯の仕事として教員を選んだのは、誰もが幸せに暮らせる社会を望み、そのような社会を作る仲間をふやすためでした。

私の思春期は高度経済成長期真只中、経済や産業の飛躍的進展、まるで国力を内外に誇るかのごとく開催された東京オリンピックに大阪万博、日本列島改造の名のもとに新幹線が走り、高速道路の建設ラッシュなど、光の部分がやけにクローズアップされた時代です。

しかし、一方で、貧困や差別に泣き、苦しむ人々も多く、彼らたちが逆境の中で、命と暮らしを守るためにひたむきに生きた時代でもありました。その姿は、多感な年頃の私の心に確実に刻印されていきました。沖縄の本土復帰を求め悲痛な訴えを続けていた人たち、公害訴訟に挑む人々、ベトナム戦争に反対して立ち上がる市民や学生などは今でも臉に焼き付いています。

その時代ごとに、立場も主張も異なる人々たちではありながら、彼ら、彼女らを突き動かしたのは、言うまでもなく、いのちを愛しむ心です。

命が軽んじられ、戦争に正義があるとされる世に、時計の針を戻さないために、大人たちが果たすべき役割を自覚し、子どもたちは、生命を尊び、人権を尊ぶ人格の育成に努めてほしいと願うばかりです。

幸いに、この学び舎には、あなたの生命と人権が大切にされる風が漂っています。  
いのちを愛しむ心さえ丈夫であれば、きっと、  
その風を感じて、その風を届けられる人になれるはず。

<校長 今井 千和世>

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。  
人はこうして生きる者となった。（創世記 2:7）

# 「いのち」

昨年子どもを産んで、改めていのちの尊さと儚さを感じています。赤ちゃんが元気に生まれ、大きく育っていくということは、奇跡の連続なのだと思います。

小さいいのちがお母さんのお腹の中に宿ること、それがまず奇跡。そして、そこから順調に育ち、外の世界に出てこられる確率は、85%と言われています。また、世界中で、年間約260万人の新生児が命を落とし、約100万人が生まれたその日に命を落としているそうです。産まれるまでも、産まれてからも、いのちが途切れず続いていくというのは簡単なことではなく、大きくなって、友達と過ごしたり、学校に通ったり、仕事をしたり、私たちが何となく過ごしている日常は、当たり前なんかじゃありません。

今年の3月に、息子が1歳の誕生日を迎えました。1年間、大きな怪我や病気なく過ごしてくれたこと、無事に1歳を迎えたことへの安心感と、感謝の気持ちでいっぱい、お誕生日前日は息子の寝顔を見ながら泣いてしまいました。それまで自分や周りの人の誕生日は、「おめでたいこと」くらいにしか思っていなかったのですが、親になって初めて、誕生日はこんなにも感動するものなのだと思います。

これから先、自分が元気でいられること、子どもがすくすく成長していってくれることに對する感謝を忘れず、過ごしていきたいと思います。

<国語科 佐野ひかり>



神様が創った命はすべて美しい。  
裏庭に住んでいる毛虫を  
スケッチをしました。

<英語科 深尾ジャネット・メイ>

言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。（ヨハネ 1:4）

## いのちについて

自分なりに「いのち」というものについて考えてみると、「今ここにあること、生きているということを実感すること」という言葉が真っ先に思い浮かびました。なぜそれが思い浮かんだのか考えてみたところ、中学生の頃に私が読んだ中で最も心の中に「ストン」と落ちた詩に書かれていた内容でした。「いのちって、生きるって、確かにこういうものなんだよなあ。」と、中学生なりに思っていた気がします。私はまもなく 35 歳ですが、今読むと実感を伴ってさらに強く理解出来ることが増えたようにも思えます。それもまた、生きているという証なのでしょう。

### 生きる 谷川 俊太郎

生きているということ  
今生きているということ  
それはのどがかわくということ  
木もれ陽がまぶしいということ  
ふっと或るメロディを思い出すということ  
くしゃみをする事  
あなたと手をつなぐこと

生きているということ  
いま生きているということ  
それはミニスカート  
それはプラネタリウム  
それはヨハン・シュトラウス  
それはピカソ  
それはアルプス  
すべての美しいものに出会うということ  
そして  
かくされた悪を注意深くこばむこと

生きているということ  
いま生きているということ  
泣けるということ

笑えるということ  
怒れるということ  
自由ということ

生きているということ  
いま生きているということ  
いま遠くで犬が吠えるということ  
いま地球が廻っているということ

いまどこかで産声があがるということ  
いまどこかで兵士が傷つくということ  
いまぶんこがゆれているということ  
いまいまが過ぎていくこと

生きているということ  
いま生きているということ  
鳥ははばたくということ  
海はとどろくということ  
かたつむりははうということ  
人は愛するということ  
あなたの手のぬくみ  
いのちということ

<国語科 木田 巧>

## 「いのちについて思うこと」

一学期を振り返ってみるといろいろなことがありました。6月の地震は突然のことで驚きましたね。地震等の自然災害は人の力ではどうしようもありません。でも予防や対処のしかたで後々の状況が大きく変わることをあらためて考えさせられました。

「いのち」について考えてみましょう。四月以降だけでも幼児虐待死や無差別殺人など、いのちに関わる心痛む事件が度々報道されました。亡くなった方を想うと残念でなりません。

「命は大切ですか？」と尋ねられれば、皆「大切です」と答えるでしょう。でも大事なことは言葉の上で理解することではなく、一人ひとりが心から実感することだと思います。そのためには見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうといった経験、心がゆさぶられるといった感覚、つまり自分の身体をとおして感じるもの、言葉になる以前の感覚を大切にしたいと思っています。なぜならこの感覚が価値あるものに「ハッ！」と気づくきっかけになり、気づくことが全身の共感を呼び起こし、それが実感へとつながるからです。さらに言うと、その実感が具体的な行動となって現れることが大切です。どのような気づきがあったのか、何を感じたのか、どのようなものの見方、考え方をしたのか、そしてそれをもとにどんな行動をとれるかが重要なのです。

話は変わりますが、私は体操部の顧問をしています。放課後芝生を通過して体育館へ向かう途中で練習の声が聞こえてきます。カウントやお互いの注意や励ましの掛け声、その声が聞こえて来た瞬間、私の心がゆさぶられ熱くなるのを感じます。それは部員の必死の想いが伝わってくるからです。力を振り絞り、自分と戦っている姿が想像できるからです。体育館に足を踏み入るとさらにエネルギーを感じ、疲れているはずなのに私は元気になります。全国大会で納得のいく、いい演技をして欲しいと願うと部員には厳しいことを要求することもあります。それに答えようと必死で取り組む姿に生きている「いのち」を感じます。自分の持っている力を引き出し磨く、失敗から学び工夫する、新しい技に挑戦する、諦めない、へこたれない！仲間を大切にする、周囲に感謝する、そんな想いのやり取りの中で自分のタレントを一生懸命磨き輝かせることは生まれてきた「いのち」を大切にすることだと考えます。中学生・高校生の君たちにできることは、与えられた「いのち」を最大限輝かせること。あらゆる命には限りがあり、命あるものは必ず死を迎えます。そして命は一度失うと取り戻すことはできません。だからこそかけがえのないものなのです。今生きているあなたは世界中にたった一人しかいない唯一無二の存在です。自分の存在を認めることが「いのち」の大切さを感じることに繋がっています。自分の考えや気持ちを伝えること、相手の言葉や態度から気持ちを汲み取ること、日々の生活の中で人と人のつながりの大切さに気づき学んで欲しいと思っています。夏休みの活動を通して新しい出会いや経験をすることでしょう。自分を見つめる良い機会となることを期待しています。2学期にはひと皮むけたたくましいみなさんに出会えることを楽しみにしています。

＜副校長 体育科 小嵯さゆり＞

## 「開けぬ夜を小さな小さな女の子 ただ一人いて天に召されし」

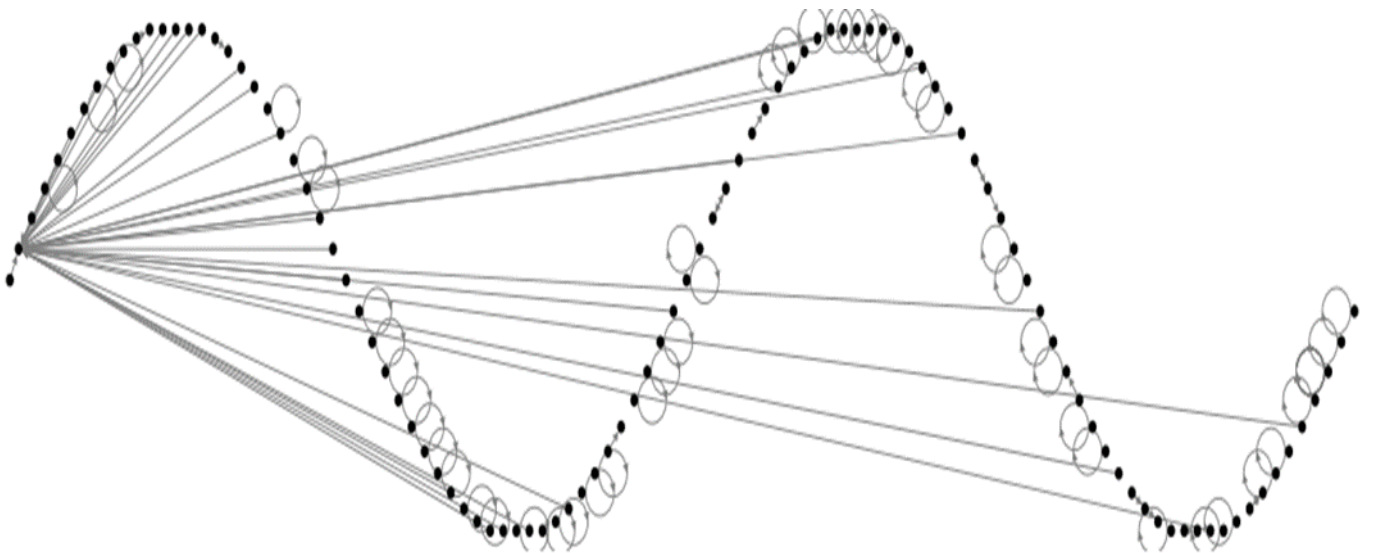
(岐阜市 原 公子／佐佐木幸綱選)

毎週日曜日の読者の短歌投稿欄（朝日新聞）に、7月1日には、虐待死した幼い女の子を悼む歌が多く選ばれていました。中1や高3の授業でもこのニュースのことを聞いてみましたが、胸をふさがれる思いのこもった目、目、目…でした。

いつもいつも誰かのことを思い、あれもこれも担うことはできませんが、これは私たちにつながる、今、起こっていることなのだと向き合う気持ちは持ちたいですね。

<教頭 国語科 今村雅子>

「点と線の連続」というのが、私の思う「いのち」のイメージです。



<社会科 奥野自由>

命の泉はあなたにあり、あなたの光に、わたしたちは光を見る。（詩編 36:10）



# 電池が切れるまで



私がこの詩を見た時、命の大切さを考えさせられ、命は本当に尊いものだと感じました。皆さんにもぜひ読んでほしいです。

<体育科 折井里帆>

もしかすると、明日は地震や何かの事件や事故に巻き込まれてこの世にいないかもしれません。

祖母は中学の頃、父はこの平安女学院に就職する際に、母は3年前に、、と順番に天国に行きました。今でも母のことを思い出すと何かの拍子にふと目が潤んできたりします。面と向かっていっぱい有り難うって伝えたいのだけれど、生前にはちゃんと伝えられないままになってしまいました。親孝行したいのだけれども、しょうがないのですよね。

大事な友人も何人かは天国に行ってます。Web 上のその亡くなった友人のブログは閉鎖されないままに残っているのですが、誕生日には沢山の人がお祝いのメッセージを書き込んで、返信が無いのを分かっている、その友人との思い出を語っています。供養のようにも感じたりします。

誰かに精一杯愛されていますか。またそして、誰かを精一杯愛せる人になれそうですか。そんな大人になる経験を今のうちから実感して行って欲しいと願っています。

<芸術科（美術）木佐貫 功>

わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、**命**の光を持つ。（ヨハネ 8:12）



## 「再会を信じて」

先日、ある教室に入っていくと、「先生、お父さん好きやろ。」と、無邪気に尋ねてくる生徒がいました。何故、そんなことを聞くのかなあと単純に不思議に思う気持ちと、少し感慨深い、熱いものがこみ上げてきました。たぶん…、その時私は、「そうやね、好きやったなあ」と答えたかもしれません。

う～ん、父が生前中ならば、きっと気負って「そうでもないけどね。」みたいな、軽口を言っていたかもしれません。父は、本当に突然亡くなりました。虚血性心疾患です。数日前まで、新調したジャケットを着て、揚々と知り合いの家を訪ねたり、楽しそうに電話をしたり、「昼食には、ハンバーグを用意してくれ。」と言っていた人が、その4日後には、何も語りかけてはくれなくなったのです。

もうその年も押迫った師走の夜8時過ぎ、帰宅途中の私の携帯に、姉から「お父さん、死んじゃった…」の声が聞こえた時から、しばらく時間が止まってしまったように、何をしたかの記憶も曖昧なままです。家族で過ごすクリスマスイブを楽しみに、ケーキやチキンの予約も買ってでてくれたり、翌年の年賀状のデザインをああでもない、こうでもないと思案してくれていたのに…。

よくドラマで、病床の肉親が「私の分まで幸せになってね」などという言葉を残し、旅立っていくというシーンがありますが、現実はそのようなものでもなく、突如「別れ」は襲ってくるものなんだと考えさせられました。

旧約聖書コレヘトの言葉3章1節に「何事にも時があり天の下の出来事にはすべてさだめられた時がある」という御言葉があります。人は生まれ出る時も、死ぬる時も、「その時」が定められたものだということなのでしょう。

同世代の従兄弟たちが、親子喧嘩をしたエピソードの話しをするたびに、正直うらやましく思うことがあります。私には、せいぜい墓石に向かって不平を鳴らすくらいのことしかできません。

この世にある生きとし生けるものを慈しむ気持ち、他の生きものからいのちを頂いて、生かされている「命」、限りあるものだからこそ尊く、失うときはあまりにも無常で辛い。

先述の「先生、お父さん好きやろ。」と尋ねてきたクラスの授業で、「それなら、ちょっと重たい話だけど、聞いてくれる」と尋ねてみる。「いいよ、話してみてよ。」という返事が返ってきた。ぶっきらぼうだけど、どこか優しく寄り添ってくれるかのように、そのまま耳を傾けてくれていたようにも思えました。

＜総合科 高1担任 濱田恵子＞

ひととき、お怒りになっても、**命**を得させることを御旨としてくださる。  
泣きながら夜を過ごす人にも、喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。（詩編 30:6）

## いのちとは、多様で奥深いもの。

<社会科 高2担任 阪野博士>

すべての生物のいのちの大きさに差はありません。もちろん一人一人のいのちの大きさも同じ。でもなんだか比べたくなってしまうよね。わたしも自分が好きになれなくなってしまうときがあります。そんなときに思い出すのは自分の母校で教えてもらった「人は生かされている」ということ。一人で生きていける人なんていなくて、みんな他の人に助けられて生きています。だから自分と同じくらい隣にいる人のいのち、もちろん自分のいのちも大切にしてほしい。まずは自分や自分以外の人を大切に思うことから始めてみてはどうでしょうか。



<理科 高3担任 中谷浩子>

Life is too precious, do not destroy it.  
Life is life, fight for it.

人生とはあまりにも貴重なものです。それを壊さないでください。  
人生とは生きることです。戦いぬいてください。

<英語科 高2担任 横山優子>

何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある。(箴言 4:23)

## 「いのち」をテーマに

「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。」

これは言わずと知れた日本国憲法前文の一部です。

全世界の国民に「平和のうちに生存する権利」があることを知っている私たちのはずなのに、毎日ネットやテレビから流れてくるニュースを見ていると、その権利が大切にされていないことがあまりに多すぎて、「またか」で済ませてしまいそうになる自分がいます。

「いのちは大切なもの」。そんなことは当たり前過ぎて、普段はあまり深く考えることがないかもしれません。実際に自分の命が脅かされることでもなければ、この「平和のうちに生存する権利」を意識することもあります。ですが、世界では毎日、この瞬間も「平和のうちに生存する権利」が侵害されている人がいます。もしかすると今あなたの隣にいる人が、その人かもしれません。あなたは周りの人の「いのち」を大切にできていますか？そして自分の「いのち」を大切だと思えていますか。

「いのち」を大切に思うこと。それは自分とまわりの人の、そして全世界の人の人権を大切に思うことだと思うのです。自分の「いのち」と隣人の「いのち」。そのどちらもかけがえのないものとして大切にするために、今の自分にできることはなんなのか。何か大きな事件が起きないと考えることを忘れそうな、この問いを今一度問い直して考えてみませんか？

＜国語科 中学指導部 大野純子＞

今年、私の父が病気で亡くなって20年になります。父を亡くした時、人の命は永遠ではないことを突きつけられ、知りました。しかし年月が経ち、心の中で人が永遠に生きるということの意味が、すこし理解できるようになった気がします。だから、目には見えない命を守ってくれている人やものに感謝して、命の奇蹟に感謝して、自分の命と人の命を大切にして、生きていこうと思うのです。

＜家庭科 高3担任 大崎あづさ＞

あなたの仰せはわたしに命を得させるでしょう。苦しみの中でもそれに力づけられます。（詩編 119:50）

テストの高い低いで、あなた自身の価値は変わらない。

体重の軽い重いで、あなた自身の価値は変わらない。

数値は目に見えてわかりやすいけれど、

あなた自身がいてくれる、それだけで価値があるんだよ。

あなたがあなたであって、それでいいんだよ。

弱いじぶんでも、だいじょうぶ。

<社会科 高1担任 小林蒼舞>

私の家に1年前、犬がやってきました。

茶色のふわふわペギニーズを私たち家族は、「まっちゃ」と名づけました。

朝ごはんの時、私の足をペロペロなめるまっちゃ。(顔をなめられるのが苦手な私にまっちゃがしてくれる工夫です)

仕事から帰ると、全力でしっぽをふって歓迎してくれるまっちゃ。

ソファの背もたれに登って、一人前に私たちの会話に耳を傾けるまっちゃ。

これらの姿を思い浮かべると、私の目頭はいつも熱くなってしまう。

一切の計算もなく、自分のいのち全体をかけて、まっすぐ目の前の人を愛するということは、本当にすごいことだ、といつも私は彼女から教えてもらっているような気がします。

<国語科 中3担任 郡山希美子>

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。(マルコ 8:36)

「いのち」というテーマから、真っ先に思い出した、

私の大好きな吉野弘の詩「生命は」を紹介します。

いのち  
生命は 吉野 弘

生命は  
自分自身だけでは完結できないように  
つくられているらしい  
花も  
めしべとおしべが揃っているだけでは  
不十分で  
虫や風が訪れて  
めしべとおしべを仲立ちする  
生命は  
その中に欠如を抱いだき  
それを他者から満たしてもらうのだ

花が咲いている  
すぐ近くまで  
あぶ  
虻の姿をした他者が  
光をまとって飛んできている  
  
私も あるとき  
誰かのための虻だったろう  
  
あなたも あるとき  
私のための風だったかもしれない

世界は多分  
他者の総和  
しかし  
互いに  
欠如を満たすなどとは  
知りもせず  
知らされもせず  
ばらまかれている者同士  
無関心でいられる間柄  
ときに  
うとましく思うことさえも許されている間柄  
そのように  
世界がゆるやかに構成されているのは  
なぜ？



<国語科 非常勤講師 駒井清行>

すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです。（使徒言行録 17:25）

## いのちについて思うこと

昨年末に父が亡くなりました。

一年間くらい入院退院を繰り返して、徐々に弱っていたので覚悟はしていましたが、そんなに急な別れになるとは思いませんでした。

その日も私は朝から高校に行って、帰りに病院に寄れば父に会えると思っていたのですが、お昼にメールを見たら、午前中の早い時間に亡くなっていて、家に帰ると冷たくなった父と対面することになりました。人の命は、本当に儚いあっけないものですね。

生きているうちに、もっと話をすれば良かった。もっと父が喜ぶことがしたかったです。

何かと頑固な父とは、ぶつかることも多くて、私が作った料理は口に合わないし食べてくれないし、いちいち文句ばかりを言うので、次第に会話が減っていったように思います。

友人の子供たちの受験勉強で、私は夕方に家庭教師に出かける機会が多くなり、父は一人で寂しく留守番していました。それで、父はますます孤食になり、気づいた時には、すっかり痩せて体力も落ちていました。もっと早くに気づいてあげれば良かったと後悔しています。

毎日毎食、何気なく取っている食事ですが、人間は口から食べられなくなると、誤嚥性肺炎などになって、食べたくても食べられなくなってしまうものなのですね。せっかく水分を取っても、咳や痰で出てしまうので、身体の中に吸収されるのはわずかです。いくら医療が発達しても点滴だけでは、命をつなぐことはできません。

生徒の皆さんは、まだ若いので実感はないかもしれませんが、毎日の家族との時間を大切にしてください。家族だからと甘えて八つ当たりしたり、傷つけるようなことはしないでね。家族だから余計に照れくさいのですが、感謝の言葉をできるだけ口にしてあげてください。

私のように、後悔しないでね。

<理科 非常勤講師 矢野 梓>

## いのちとは、それだけで美しいものです。

<英語科 東 真也>

わたしが**命**のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、  
わたしを信じる者は決して渴くことがない。(ヨハネ 6:35)

「いのちについて思うこと」

この文章を読んでいるあなたの両親、その両親の両親、その両親の両親の両親、その両親の両親の両親の両親、その両親の両親の両親の両親の両親、その両親の両親の両親の両親の両親の両親、その両親の両親の両親の両親の両親の両親の両親まで数えていくと、誰にでも104万8576人の先祖がいる計算になるそうです。この中で一人でも、いなかったら、あなたはここにいません。

ここで夏休み課題です。あなたの両親の両親の両親、つまりおじいちゃんとおばあちゃん  
の両親について、名前とどんな人だったか聞いてみましょう。

＜英語科 菊地昭男＞

私にとって「いのち」とは

**あったかい、つながりあえるもの。**

**誰にでもある平等なもの。**

**こころ動かされるもの。**

**みんなで大切にしたいもの。**

皆さんにとっての「いのち」は何ですか。

**ぜひ聞いてみたいと思ってます。**

＜保健室 古高詩織＞

だから、言うておく。自分の**命**のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。  
**命**は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。(マタイ 6:25)



# 「命」

という漢字は人屋根に一叩きと書きます。これは、この世に誕生する前

から、母親のお腹の中にいるときから、トクントクントクン、寝ているときもずっと働き続けてくれている心臓のことを表しています。トクントクントクン、この一叩き、一叩きの連続が命なんです。

私が「いのち」と聞いて最初に思いついたのは、お笑い芸人TIMのゴルゴ松本さんです。「命」と言いながら体で漢字の「命」を表現するネタは一時期ものすごく流行しました。ゴルゴ松本さんは、「あっ！命の授業」という本を出版されています。もともと後輩芸人や少年院の子どもたちに伝えていた内容をまとめたもので、漢字や日本語について独自の解釈で話し、聞く人を前向きな気持ちにさせるという内容です。松本さん自身もこじつけと言っているのですが、不思議と「なるほどなあ」と思い、前向きな気持ちになってきます。冒頭に書いた「命」という漢字の話も松本さんの話です。

私が松本さんの話の中で最も印象に残ったのは「かなう」の話です。夢や目標を実現できるかどうか、それはどういうことを言って自分を作っていくかということです。口にプラスマイナスと書くと「吐く」という字になります。口偏に土ですね。プラスなこともマイナスなことも吐き出していいんです。喋っていいんです。だけど、夢を実現する人というのは、少しずつ変化が現れます。弱音を吐かなくなってくる。マイナスなことを吐かなくなってくるんです。少しずつ、少しずつマイナスを取っていくんです。「吐く」という字からマイナスを取ると…。「吐く」の土の部分の一番下の横棒を取ってくださいね。すると、口にプラスで「叶う」になります。やっぱりプラスの言葉を喋って話していく方が絶対いいんです。普段、この「叶う」という字を見かけるのは、テレビで叶姉妹が出てきたときくらいの人もあるかもしれませんね。そう「叶う」は「かのう」とも読みます。夢や目標を叶えることは可能性がある。可能なんだよということです。ここからは私の解釈ですが、ではいつからプラスの言葉を意識するのか、いつから夢や目標に向かっての行動を始めるのか。「かなう」の中には「なう(now)」という英語が入っていますね。林修先生と重なりますが、ぜひ今から始めてください。

言葉遊び（どこぞの元事務次官が言っているものとは違います）は私も大好きで、しばしば駄洒落を言うのですが、言葉遊びで人を前向きな気持ちにさせる松本さんは、改めてすごい人だなと思いました。「あっ！命の授業」お勧めです。

<数学科 高3担任 安田圭吾>

あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。  
あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません。（ヤコブ 4:14）

## いのちについて思うこと

「いのちは大事です」それは当たり前のことでしょうか。日本の自殺者は年々低下しているものの未だ2万2千人を超えます。そのうち15歳～34歳の自殺率が高いのが特徴です。

自殺は「(社会にいきる) 自分に絶望し、最も自らを否定すること」から起きるのではないのでしょうか。それほどまでに思い悩んで、一線を踏み込んでしまったひとが2万2千人。

あなたたち10代の若さでも、いま34歳の私でも、様々なことに心がえぐられて、本当に自分が嫌になることはあります。それがどんな理由でも命に換わるほど重い絶望になりえます。ですから真剣に、、、「自分の言葉で悩む」だけでなく、他者にも「救い」を求め続けてください。いのちが預けられているうちは肯定される瞬間もあるはずです。それに気づくことが出来たら「いのちって大事なんだなあ」と本当に実感されるのだと思います。

＜総合科 高1担任 佐藤昂樹＞

## いのちについて

**「ぼくはね、花を持ってて、毎日水をかけてやる。**

**火山を三つも持ってるんだから、**

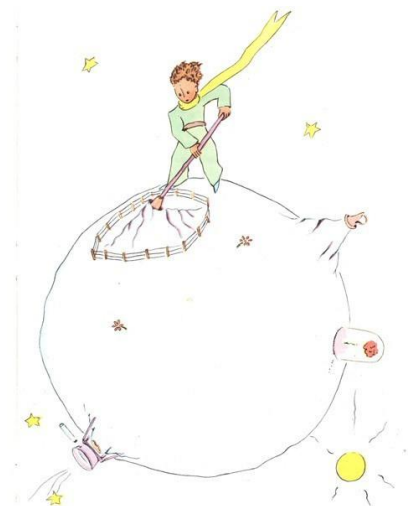
**七日に一度すすはらいをする。**

**火を吹いていない火山もすすはらいをする。**

**いつ爆発するか、わからないからね。**

**ぼくが、火山や花を持ってると、**

**それがすこしは、火山や花のためになるんだ。」**



「星の王子さま」 サン＝テグジュペリ作 内藤 濯（ないとう あろう）訳

＜国語科 角 好恵＞

わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。（ヨハネ 10:11）

## いのちとは何か

を考えるきっかけはこどもの誕生が一番ではないかと思います。そしてもう一つはいのちが失われそうになったり、いのちが失われたときにいのちとは何かを捉えるのではないのでしょうか。

私には今 89 歳の父がいます。70 代の時にパーキンソン病を発症し、少しずつ病気が進行し歩けなくなり、車椅子の生活となり、やがて自分で食事を取れなくなりました。だんだん味覚も甘いものしかおいしいと感じなくなってきたお見舞いに行くと「アンパンが食べたい」と言うのですが、固形物を飲み込むことが難しくなっていたので「また良くなったら持ってくるね」と返事するのがとても心苦しかったです。そして、娘を心配して「早く帰り、病院にはもう来なくても良いから」といつも言うのです。

先日の日曜日にも病院に見舞いに行ってきたのですが、最近ほとんど寝た切りの状態で声をかけてもまばたきするだけで目が見えているのかどうかもわかりません。おしゃべりすることもできません。

父を見ていて河井醉茗のゆずり葉という詩を思い出しました。

国語の教科書に載っているので知っている人も多いと思いますが、こんな詩です。

ゆずり葉  
子供たちよ。  
これはゆずり葉の木です。  
このゆずり葉は  
新しい葉が出来ると  
入り代わってふるい葉が落ちてしまうのです。

こんなに厚い葉  
こんなに大きい葉でも  
新しい葉が出来ると無造作に落ちる  
新しい葉にいのちをゆずって――。  
子供たちよ  
お前たちは何をほしがらないでも  
すべてのものがお前たちにゆずられるのです。  
太陽のめぐるかぎり  
ゆずられるものは絶えません。

かがやける大都会も  
そっくりお前たちがゆずり受けるのです。  
読みきれないほどの書物も

みんなお前たちの手に受け取るのです。  
幸福なる子供たちよ  
お前たちの手はまだ小さいけれど――。

世のお父さん、お母さんたちは  
何一つ持ってゆかない。  
みんなお前たちにゆずってゆくために  
いのちあるもの、よいもの、美しいものを、  
一生懸命に造っています。

今、お前たちは気が付かないけれど  
ひとりでにいのちは延びる。  
鳥のようにうたい、花のように笑っている間に  
気が付いてきます。

そしたら子供たちよ、  
もう一度ゆずり葉の木の下に立って  
ゆずり葉を見る時が来るでしょう。

この詩を初めて読んだ時、私はまだ子どもだったのですが、いのちは草木も動物も受け継がれていくものなんだと強く心に残りました。

<保健室 森川真里子>

## いのちのメッセージ

先日の地震の後今度は大雨から濁流による災害のニュースに胸が痛みます。  
私は、まだ5歳であったとき、その頃、父の仕事の関係で、奈良県十津川村に居住していました。  
伊佐湾台風で、私たちが住む家が目の前で、濁流に飲み込まれ、流されていきました。  
奇跡的に 家族全員危機一髪のところ助かったという記憶が蘇ってきました。  
子供心に目に焼きついている天災の恐怖、命からがら家から飛び出したので、何にもありません。この時も村の人々や多くの人に、助けられた記憶があります。  
「生命」あることへの感謝 そして人々を思いやるこころ「いのち」を大切に思うこと。  
改めて心に 沁みています。

<理科助手 藤原美幸>

主を畏れれば命を得る。満ち足りて眠りにつき、災難に襲われることはない。(箴言 19:23)

## いのちについて思うこと

大学生の頃、生きているのが嫌になったことがありました。

その日はよく晴れていて、何もしなくても汗がでるような日でした。大学1年生だった私はその日、練習前にしなければならない部活の仕事を完璧にこなすことができなかったために、先輩から練習に参加するなと言われました。しかしここで引き下がるわけにはいかず、練習させて下さいと頭を下げたら、フロアに居られると邪魔だから、練習が終わるまで上で走ってくださいと言われました。啞然としましたが、言われたことをやらないという選択肢はなかったので、体育館の上に移動して、みんなが練習しているのを視界に入れながら5時間半ランニングし続けました。気が狂いそうで、窓にそのまま突進して外に飛び出したら痛いけど走らなくて済むし、そっちの方が楽やなと本気で考えながら走っていましたが、他の部活の学生も利用する場所だったので、なかなか人目にはいないタイミングがなく、窓に突進する意欲も2時間ぐらいで消えました。誰も居ない環境が整っていたら、確実に3階のランニングしていた場所から外に飛び降りていたと思います。

あの5時間半は地獄でした。私にランニングを命じた先輩は、どういう意図で5時間半走らせたのか、今でも理解できません。でもその先輩をものすごく恨んでいるわけでもないし、一瞬でも死んだほうが楽と思ってしまった自分の情けなさに気づけたので、それはいい気づきだと自分で自分を納得させています。

あれからたくさんの時間が過ぎて、生きていてよかったと思うことを数え切れないぐらい経験してきました。毎日がハッピーなわけではないけれど、人生悪いことばかりではないし、生きていないとハッピーなことにも出会えない。そのことに気づくことができてからは、生きることが嫌になったことはありません。きっとこれからもたくさんのハッピーに出会えるように、命ある限り、その命を大切に生きていくと思います。

平安女学院に関わるすべての人に、たくさんのハッピーが訪れますように。

<体育科 非常勤講師 北川樹里>



わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。  
わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。(ヨハネ 4:14)

## 「いのちについて思うこと」

命を授かった時はこの世の全ての事に感謝をしました。  
命をこの世に送り出す前は、自分の命に代えても無事に生まれることだけを祈りました。  
命をこの世に送り出した時は、ただただ健やかな成長のみを願いました。  
そして成長を見守りながら  
いろいろなことにチャレンジして、自分らしい人生を送ってほしいと応援をし、  
間違ったことをすれば真剣に叱ります。  
でもいつも願うことはいつも同じで、心も体も健康であってほしい。それだけです。  
そしてこの願いはずっと続きます。

＜事務部 河原林 豊美＞

世界の人口は約 74 億人、日本の人口は約 1 億 2000 万人  
一年間に生まれる数約 20 万人、亡くなる数 15 万人  
毎秒 2.4 人赤ちゃんが誕生し、1.7 人の命が何かで消える  
これは人の命だけを表した数字  
様々な生物の数を入れたら…  
今生きていることは奇跡に近いのかもしれない  
今生きていることに感謝を！

＜社会科 稲葉兼直＞

**いのち**が大切なのは、それが、与えられたものだから。

私たちが生まれる前から、ずっと繋がってきたものだから。

そして、終わりが必ずくるものだから。

与えられた**いのち**を大切にすること、今を大切にすること。

自分を大切にすること。周りの人を大切にすること。

＜情報科 高 1 担任 今井由希美＞

朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の**命**に至る食べ物のために働きなさい。（ヨハネ 6:27）

いのちとは、かみさまから与えられた最高の贈り物です。  
そのいのちは尊く、かみさまの栄光を輝かせるために存在します。  
与えられた時間とともに大切にしていきたいです。

<音楽科 高1担任 米田 晋>

生まれたっ！ (孫です♥)  
ありがとう



<聖書科 非常勤講師 仲村順子>

アダムは女をエバ(命)と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。(創世記 3:20)



昨年の2月、わが家の小さな庭に見慣れない鳥を見つけました。体長はスズメより一回り大きく、地味な色合いで、野鳥にしては珍しく、警戒心の感じられないおっとりとした鳥でした。わが家の「自称・鳥博士」によると、その鳥はシロハラという種類で、日本で冬を越す渡り鳥だそうです。今年の冬に再会をはたしたその鳥に、わたしは親しみをこめて「ハラさん」という名前をつけ、えさ台に落花生を置いては、ついばむ姿を見守っていました。

数日たったある朝、びっくりすることが起こりました。なんと、ハラさんが窓越しにこちらの様子を伺っているのです。少なくともわたしにはそう見えたのです。「え！？もしかして、落花生を待ってる？」と思い、そっと窓を開け落花生を放りました。もちろん、ハラさんはすぐに木の陰に隠れましたが、しばらくするとその落花生をついばみ始めました。それから毎朝のように、地面からこちらを見上げエサを待つハラさん。特に鳥好きではなかったわたしですが、そのかわいい姿にがっかりと心をつかまれてしまいました。

野鳥にエサをやってはいけませんが、落花生1, 2粒のことだからと言い訳しながら、毎朝ハラさんの訪問を楽しんでいました。しかしわたしは、あることを思い出したのです。ハラさんは渡り鳥です。春が近くなったということは、ハラさんが旅立つ日も近いのです。

そして、その日はやって来ました。わたしは家族の無事を祈るような気持ちで、ハラさんの長い道のりの無事を願いました。あんなに小さなからだで、しかも自分の力だけを頼りに、遠い外国（図鑑には中国やロシアとありました）まで飛んでいくなんて、わたしたち人間には到底真似のできない驚くべき力です。小さな命が生み出す力に、大きな勇気をもらった春でした。

今頃ハラさんは、無事に長旅を乗り越え、次の世代に命をつないでいることでしょう。できるなら、また次の冬、ハラさんに会いたいなあと、時々えさ台を見つめています。

＜図書室 安田友里＞

**命は目に見えないもの。**

**目に見えないものほど大切なものはありません。**

**心もそう、空気もそう、そしてもちろん命もそう。**

＜事務部 吉田 研＞

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネ 3:16）



## 「いのちについて」 ―8月に思うこと―

毎年8月が近づいてくると、戦争について考えさせられる機会が増える。戦後(日本では「戦後」は太平洋戦争をさす)70年以上経った現在、日本が戦争をしたのは遠い日の出来事だったのかも知れない。生きてそのことを伝えられる人も少なくなっている。

太平洋戦争では日本は軍人が200万人、民間人が100万人、合計300万人以上の人が犠牲になったといわれる。これまで戦争の犠牲者について8月の新聞の特集などは目にしていたし、原爆については授業のテキストをつくるために詳しく調べたことはあるのだが、300万人もの人が4年間でどのように亡くなったのかということについて、自分から調べてみることはあまりしなかった。

今から20年ほど前つくられた「プライベート・ライアン」という、スティーブン・スピルバーグの映画がある。その映画の冒頭はそれまでの戦争映画と違って、戦闘シーンをかなりリアルに再現したものであった。それは、私にとって戦闘を等身大に感じさせてくれたという意味でかなりショックであった。この映画の前後から、8月が近づくたびに戦時下の日本の日記、戦争への従軍記、ポツダム宣言受託後(8月15日以降)に起こった出来事、9回も特攻に出撃した兵士の話、戦争の犠牲者の多くが戦闘ではなく、飢え・病気で死んでいった記録等についてさまざまな本を読むようになった。さらに、現代のハイテクを駆使した戦争がどのように行われているかのレポートや、科学がどのように戦争に関わったか等についての本についても手に取るようになった。その中でおぼろげながら分かってきたことがある。

戦争は人の命を奪う。人の命を奪うことが正当化されて戦争は始まる。そして戦闘現場では相手の命を奪わなければ自分の命が奪われる状態に置かれ、否応なく命を奪う行為が繰り返されていく。しかし戦闘に於いて実際に対峙している兵士たちは、お互いに相手を殺す個人的な恨みや理由があるわけではない。命を奪う対象について何も知らずに、そして相手を命あるものだと思わないようにして命を奪うのである。

太平洋戦争の日本は「鬼畜米英」のかけ声の下に戦時下で意図的に憎しみを育まれてきた。そしてさらにひどいことに、前述の様に日本の中でも兵士は(そして国民も)命あるものとして扱われずに、多くの人たちが無駄に命を奪われた事実も明らかになってきている。

現在も地球上にいくつかの戦闘が起こっている。武装解除を行い、平和を実現していく方法は非常に困難である。しかし、戦争の解決や被害者への支援に携わっている日本人も多くいる。その人たちの話の中に平和への道筋を歩むためのヒントがある。

この夏、またたくさんの特集が新聞やテレビで組まれるだろう。じっくりとそのような特集に触れて、多くの命を奪う戦争を起こさないためにできることを考えてみてはいかがだろうか。

＜理科 高1学年主任 岩間 徹＞

命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。(マタイ 7:14)

命は尊い愛のエネルギーです。

勉強や仕事と忙しい日々が続きます。

日常生活に追われる毎日、

冷静に自分を見つめる時間を忘れがち。

時々自分を見つめ、命の尊さを考えてみましょう。

忙しい日々の中に、楽しさを実感しながら、一日一日を大切に。

命は尊い愛のエネルギーです。

人生は山あり谷あり。

つらい苦しいときもあり、希望に満ちた勢いづいたときもあり。

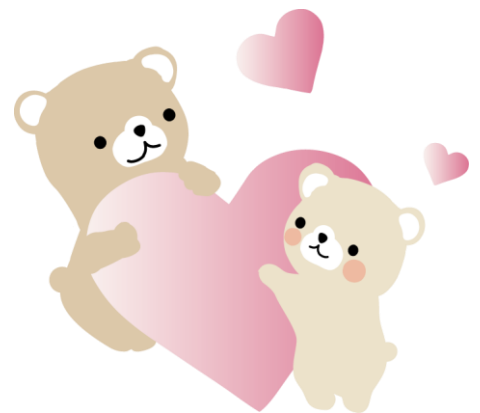
自分の夢に向かって行こう。

<守衛 山脇 昇>

誰もが持っている大切なもので、

誰によっても侵害されてはならないもの

誰からも軽んじられてはならないもの



<家庭科 高2担任 郡山玲子>

わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。

わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。(ヨハネ 4:14)

そうだ うれしいんだ いきる よろこび  
たとえ むねのきすが いたんでも  
ああ アンパンマン やさしい きみは  
いけ！みんなのゆめ まもるため

なにが きみのしあわせ なにをして よろこぶ  
わからないまま おわる そんなのは いやだ！  
わすれないで ゆめを こぼさないで なみだ  
だから きみは とぶんだ どこまでも

そうだ おそれないで みんなのために  
あいと ゆうきだけが ともだちさ  
ああ アンパンマン やさしい きみは  
いけ！みんなのゆめ まもるため

軽快なリズムの「アンパンマンのマーチ」。

作詞したやなせたかしさんの「人は何のために生きるのか」、問いかけるメッセージが心に響きます。東日本大震災のときにも、広く歌われ、多くの人を励ましたといえます。

東日本大震災より、ずっと以前。

学生時代、部活動のランニングのとき、「走るのは大嫌い、  
でもこれを歌いながら走るとすぐ終わるんだよね」、  
と言っていた友人がいました。

彼女は部活動を引退後、同級生の前に姿を見せなくなり、  
気がつくと大学にも来なくなり、卒業も1年遅れました。

阪神大震災が起きたのは大学卒業目前のときです。  
希望がある未来はどこにも見えないような気がしていました。

誰よりも速く軽やかに走っていたあのときの彼女も、  
この歌詞をつぶやきながら、どんなことを考えていたのだろう。

6月18日の大きな地震があつて、  
忘れたいと思っていた記憶が、浮かんたり沈んだりしています。

< 事務部 正司麻子 >

自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。（マタイ 16:25）

『いのち』について、自分自身が母親になってからいろいろと考えるようになりました。私の母親＝子供のおばあちゃんが、子守をしている姿をみると「私もこんなに大切にしてもらっていたのだな」と感じます。赤ちゃんだったわが子も、少しずつ『こども』になっていくその成長を楽しみ、私も元気に過ごせることに感謝しています。

＜英語科 中3担任 小林恵里子＞

「嘉代、仕事楽しいか??」父が最後に私に残してくれた言葉です。「楽しいよ」って答えたら満足そうにしていました。その言葉に、もっと生きたかったという父の思いを感じた時、私はこの人のぶんまで頑張って生きようと思いました。命は限りあるものです。いつその終わりが来るかは誰にもわかりません。だからこそ毎日を丁寧に生きる。それがいのちを大切にすることに繋がると私は思っています。

＜体育科 中1担任 山本嘉代＞

昨年、友人が癌で死去しました。余命4ヶ月の宣告を受けてから、1年半生きました。印象に残ったのは、宣告を受けてから、体調が思わしくないにも係わらず身辺整理を始めたこと。あと体が動くときは、普段どおりの生活をしていました。買い物したり、食事に行ったり、観劇にも行ったりしていたようです。最期は、家族の方に見守られながら病院のベッドで、眠るように亡くなったそうです。

私の祖母が亡くなる瞬間、たまたま私は祖母の手を握っていました。20数年前のことですが、人の死の瞬間に立ちあったことがいまだに心のどこかに残っています。

独り死んでいく人もいれば、交通事故や、不慮の事故などで亡くなる人もいます。自分がどんな死に方をするのかわかりません。でも、どんな生き方をするかはわかる・・・かな???←いまだ、迷いがありますが…

＜事務部 中島博美＞

あなたの仰せはわたしに命を得させるでしょう。苦しみの中でもそれに力づけられます。(詩編 119:50)

若い頃はとくに、「私は、産んでくださいと親に頼んだ覚えはない」と思うことが多いのかもしれませんが。たしかに、どんな国の、どんな両親のもとに産まれてくるかなんて、子どもは選ぶことができません。しかし、産まれ出でてくるその瞬間、赤ん坊は、「生きる」ために持ち合わせているすべての力を使うのです。身体を旋回させ、生まれ出るスピードを調節し、呼吸方法まで変えて。誰も、産んでくれと頼んだ覚えはないけれど、与えられた「いのち」を自分のものにしようという試みは、驚くべきことに、誕生するその日から始まっているのです。どんな場所や境遇に産まれても、自分の人生を他人のせいにすることなく、自分らしく、力強く輝かせていきたいものですね。

<カウンセラー 田辺瑠美>

**Don't compare yourself to  
other people today.  
Compare yourself to  
who you were yesterday.**

<英語科 キーラン・レッドモンド>

**命とは、たったひとつしかない光**

<音楽科 高2担任 三浦祐香>

わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。  
渇いている者には、**命**の水の泉から渇なしに飲ませよう。(ヨハネの黙示録 21:6)

## 編集後記

夏休みを前に、大きな地震と大雨を次々と経験し、わたしたちがこの星の支配者ではなく、自然とともに生かされている被造物であることを改めて知ることとなりました。一人ひとりに与えられたいのちの儚<sup>はかな</sup>さを思うとき、どうして神さまはわたしたちをこれほど脆<sup>もろ</sup>くお造りになったのだろう、どうしてもっと鋼のような、ちょっとやそっとのことでは壊れない身体と心を与えてくださらなかったのだろうと嘆きたくなります。

でも、そんなとき、ふとわたしたちのまわりを見回すと、その小さな今にも壊れそうないのちを必死で守ろうとしている人々に会うのです。だれかのために祈りをささげる人。傷がつかないよう、大切に、大切にあなたを育ててくれる人。自分が多少痛い目に遭ってでも目の前にいる人を助けようとする人。そして、失われたいのちの前にただただひざを折り、涙を流し続ける人...

神さまは、わたしたちに人を大切に思う心、「愛」をもっとも大いなるものとしてお与えくださいました。いのちが儚いのは、神さまがこの愛と、祈る心を何よりも大事に思っておられるからかもしれません。愛と祈りがある限り、わたしたちのいのちは永遠に残る宝物として、人から人へと受け継がれてゆくのです。

あなたは、愛されるため、そして愛するため  
この星に生まれてきたことをいつまでも忘れずに。  
あなた自身を、そしてあなたの隣にいる人を大切にしてください。

この小さな冊子があなたいのちを輝かせる一筋の光となることを願いつつ

＜チャプレン 古本みさ＞



*since 1875*

*St. Agnes'*